Institute for Women's History & Culture
Kyoto Tachibana University

CHRONOS

「雨だれ石を穿つ」八色佳那（本学文学部学生／tachibana photo）

クロノス［時の鳥］vol.47 2022.10

CONTENTS

〈巻頭エッセイ〉
過去に開かれた窓 2
作品のウチソト 2
歴史遺産とジェンダー 2
イギリス女性生活誌 47
近代日本音楽史を彩る女性たち 8
女性歴史文化研究所
第29回シンポジウム報告
INFORMATION

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橘の花の香り。
その橘を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。
「CHRONOS時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥を
イメージしています。

女性の活躍を阻む日本型雇用制度

竹内 直人
本学経済学部経済学科教授

意識ではなく制度が問題

先ごろ、世界経済フォーラムが二〇二二年版の「ジェンダーギャップ報告」を公表した。[1] 日本は総合で一四六か国中一一六位。女性の管理職比率など経済分野では一二一位、アジア太平洋地域一九か国で最下位である。教育における男女格差は最も小さいのだから、これは意識の問題というよりも「社会における制度又は慣行が、…男女の社会における活動の選択に対して中立でない影響を及ぼ」（男女共同参画社会基本法四条）していると考えるべきだろう。

それでは、我が国の制度の何が女性の管理職進出を妨げているのだろうか。経済学や雇用分野の研究を手掛かりに、その構造を素描したい。

水平的な情報システム：メンバーシップ型システム

組織の経済学によれば、組織には情報システムとインセンティブシステムの二つの側面がある（青木／奥野）[2]。簡単に言えば、前者は、目的達成に向け情報交換し協力するチームとしての組織であり、後者は、メンバーが怠けたり、組織を辞めたりしないよう、昇進や昇給により、やる気に配慮する組織である。現代組織論は、この二側面をめぐり展開してきた。バーナードの「有効性」「効率性」という独特の概念[3]、マーチとサイモンの「問題解決組織」、「価値に関わる組織」[4]は、いずれも、前者は情報、後者はインセンティブについて述べている。青木はさらに、日米企業を比較して、情報システムには二つのパターンがあることを明らかにした。垂直的および水平的なシステムである。

垂直的な情報システムでは、一人ひとりの働き手の担当職務がはっきり決められ、それに基づき仕事が進む。そこから生じる縦割りは、共通の上司が、これまた職務として調整・統合を行う。情報は下から上（報告）、上から下（命令）という垂直の流れとなる。欧米を中心に世界共通の組織の基本原理である。近年広く受容されている濱口桂一郎の分類に従えば、ジョブ型システムということになる。

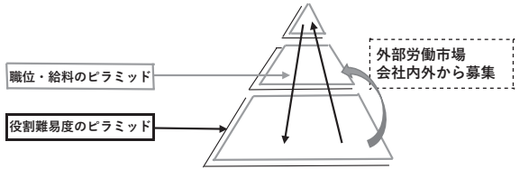
一方、水平的なシステムでは、職の内容は曖昧であり、コミュニケーション能力に優れた多機能な労働者が、縦横に調整を行う。本社とディーラー、下請けが緊密な関係をもつトヨタ式生産がモデルとされる日本型である（青木）[5]。濱口の分類では、メンバーシップ型システムである。[6]

昇進のしくみ：能力は努力の結果

本稿の関心は女性の管理職昇進であるから、右に述べた情報システムの違いが、昇進にどのように影響するのか、そのメカニズムを見ていこう。

垂直的なシステムでは、情報処理の難易度に応じて職が評価され、難しい仕事にはそれに応じた役職と給料が与えられる。職の内容と職位・給料のピラミッドは一致する（図1）。サッカーのキャプテンやアメリカンフットボールのクォーターバックを想定すればよい。役割と職位が一致している。仕事内容が明確に決まっているから、採用は組織を超えて広がることが可能で、昇進も、自社・他社問わず、よりよい職を求め「自ら自身に投資し道筋を切り開いて行く」（経済産業省）[7] 主体性が重要になる。経験、資格、学歴等を積極的にアピールし、ポストにチャレンジする。一方、昇進を望まず競争から降りることも選択肢である。

【図1：欧米型の垂直システムの昇進】



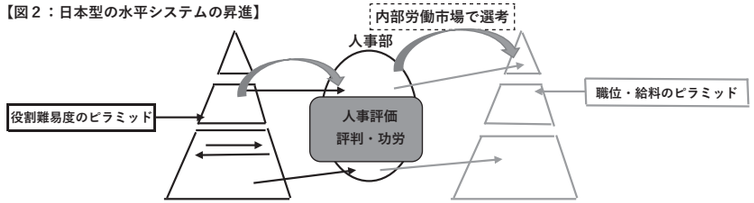
役割の難易度のピラミッドと職位・給料のピラミッドが一致

一方、日本型の場合、情報は水平に広がり横の調整が重要である。調整の巧拙に基づきある種の権威（あの人は頼りになる）は生まれるが、それは役職や給料とは直結しない。役職は大相撲の番付方式である。番付は過去の成績や人格・識見で決まり、仕事の難易度とは直接関係がない。ピラミッドは、その意味で恣意性を含む。日本の会社では、同じ仕事を異なる職位の職員が担ったり、同じ仕事でも人によって給料が違ったりする。欧米型組織では考えられない。

ここから、次のような特徴が生まれる。職位の基準が曖昧な我が国の競争は、他人との比較となり、昇進は欧米型の能力実証ではなく、周囲の納得が重要になる。ここに人の潜在能力は平等で、能力の違いは努力の差、という日本的努力主義（カミングス）[8] が加わると、結局、昇進は長時間の残業や休日出勤など努力量により測られることになる。日本型システムでは、能力は組織に依存する（林）[9]。管理職は専ら組織内から選ばれる慣行がこれに拍車をかける。

人事評価は、大変な部署や困難なプロジェクトで苦労した職員を選び、職位のピラミッドに位置づけることである（図2）。「あいつはあれだけ苦労したから」と周囲の納得が重要になる。もちろん、仕事の苦労は人を育てるが、日本では苦労が育成の域を超えて、長時間労働など私生活を犠牲にするインセンティブとして逆機能する。

【図2：日本型の水平システムの昇進】



役割の難易度のピラミッドと職位・給料のピラミッドは人事評価がつなぐ

持続不可能なシステム：制度全体の見直しを

このような日本型システムは男女を問わず、労働者に負担を強いる。苦労主義は制度を通して内面化され、過労死など悲惨な問題を生む。上司、同僚、部下からの基準なき全方位評価は、競争から降りることが人格否定（パワハラ・セクハラ）につながる傾向を孕む。女性が当たり前に働く時代、女性だけの働きやすさや活躍を狙った改革ではうまくいかないだろう。日本型雇用制度は、今なお、女性が家庭を守り、男性は企業戦士となって働く役割分担を前提としており、働く女性に多くの負担を強いている。問題はシステム全体にある。

女性活躍推進が管理職率などの数値と同視され、女性用役職がつくられる（大内）[10] など課題も現れている。システム全体を見渡した改革を進めなければならない。

【参考文献：参照順】
1) 世界経済フォーラム「ジェンダーギャップ報告2022」二〇二二年。https://www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2022/
2) 青木昌彦／奥野正寛『経済システムの比較制度分析』東京大学出版会、一九九六年。
3) バーナード・C『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、一九六八年。
4) マーチ・J／サイモン・H『オーガニゼーションズ第2版』ダイヤモンド社、二〇〇四年。
5) 青木昌彦『日本経済の制度分析』筑摩書房、一九九二年。
6) 濱口桂一郎『ジョブ型雇用社会とは何か』岩波新書、二〇二二年。
7) 経済産業省「雇用システム及び少子化対策に関する海外調査 雇用システム編」Washington CORE L.L.C.、二〇〇五年。
8) カミングス・ウィリアム・K『日本の学校』サイマル出版、一九八八年。
9) 林嶺那『学歴・試験・平等』東京大学出版会、二〇二〇年。
10) 大内章子「女性の管理職昇進」日本労働研究雑誌№722、二〇二〇年九月。

過去に開かれた窓 2

後藤 敦史
本学文学部歴史学科准教授

十一年後の絶望を回避するために
―「歴史総合」とジェンダー主流化

新しい科目「歴史総合」

二〇二二年四月より、高等学校において新しい科目である「歴史総合」が始まった。二〇二三年には「世界史探究」、「日本史探究」という新科目も始まることを考えると、まさに現在、歴史教育が抜本的な改革の時期を迎えているといえる。

二〇一八年に告示された「学習指導要領解説」にもあるように、「歴史総合」は、「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得」する科目と位置付けられている。従来の「世界史A・B」、「日本史A・B」の強みを継承しつつ、現代世界が抱えるさまざまな問題を歴史的な観点から考察する、そのような科目を「歴史総合」は目指している。

筆者は、新科目「歴史総合」に関して、教科書、および副教材の執筆・作成に携わる機会を得た。ここでは、一教科書会社の執筆に携わった、一執筆者の雑駁な所感にとどまるものではあるが、「歴史総合」とジェンダーという点に関して筆者が思うところを述べ、今後のより本格的な議論の一助となることを目指したい。

『歴史教育とジェンダー』が問うたこと

十一年前の刊行となるが、長野ひろ子・姫岡とし子編著『歴史教育とジェンダー――教科書からサブカルチャーまで』（青弓社、二〇一一年）は、歴史教育とジェンダーの問題を考える上で、最も重要な手引きのひとつとなる。本書の冒頭で、編者のひとりである長野ひろ子は、世界経済フォーラムが毎年発表するジェンダーギャップ指数に関して、二〇一〇年の日本が一三四か国中の九四位という状況であったことを示す。この危機感を背景に、歴史教育におけるジェンダー視点の導入を追求し、日本、そして世界が抱えるジェンダー格差の解消に資するために編まれた書といえる。

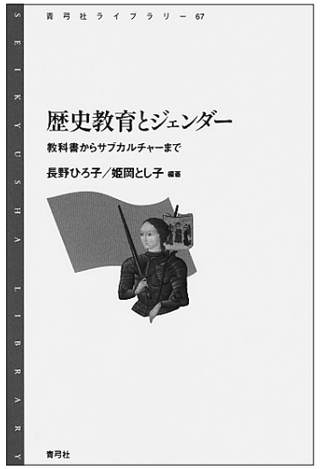
個々の執筆者によって論点は異なるが、本書を通じて大枠として主張されているのは、①現行（二〇一一年当時）の歴史教科書には、ジェンダーという視点が欠如していること、②「ジェンダー主流化」のための、教科書の全面的な改訂が必要、という点である。

「ジェンダー主流化」とは、ジェンダーという視点が、当然のものとして明確に組み込まれていることを指す。この点を踏まえると、歴史教科書にジェンダーの視点が欠如しているという批判も、納得ができる。たとえば、世界史A・B、日本史A・Bの教科書には、近現代の女性による参政権獲得運動や、それに奔走した女性たちの名前は記載されている。しかし、『歴史教育とジェンダー』が批判するように、教科書の叙述は、基本的には、近現代世界において「公的」な場とされた政治史が中心である。そのため政治の場から長らく排除されていた女性たちが、ほとんど姿をあらわさない。逆にいえば、政治参加を認められた〝成人男性中心〟の叙述が、歴史教科書の主軸をなしている、ということである。

「歴史総合」という一大好機？

『歴史教育とジェンダー』での提言から十一年後の今日、「歴史総合」という新しい科目が始まった。二〇一一年の時点で、教科書の全面改訂という提言は、なかなか実現が難しかったかもしれない。しかし、まさに教科書の内容を全面的に書き改める一大好機を歴史教育界は得たといえる。

しかし、残念ながら、「歴史総合」の教科書がジェンダー主流化を実現できているかと問われると、筆者は悲観的にならざるを得ない。もちろん、教科書会社それぞれで、ジェンダー史の最新の成果を取り入れる工夫がなされていることは間違いない。手前味噌ながら、筆者が携わった「歴史総合」教科書でも、女性史やジェンダー史に関する特集ページやコラムの充実を試みている。



出典：長野ひろ子・姫岡とし子 編著『歴史教育とジェンダー 教科書からサブカルチャーまで』青弓社、2011年

しかし、あくまでも特集ページやコラムである。教科書の本文そのものの叙述においては、やはり残念ながら、「ジェンダー主流化」を達成できているとは言い難い。これは、どの「歴史総合」教科書の本文も、共通しているのではないだろうか。

全教科書の精緻な分析は、これから本格的に進められることであろう。ここでは、教科書がジェンダー視点を導入することが、制度的に困難となっていることに触れておきたい。

試みに、「歴史総合」に関する「学習指導要領解説」のPDF版で、「女性」という語句を検索にかけてみる。すると、「女性」の語句が一四回登場する。その半分近くが、第一次世界大戦期の女性の地位向上、および大正デモクラシー期の日本の婦人参政権獲得運動に関わっている。これらは、従来の世界史A・Bや日本史A・Bでも取り扱われてきた、いわば女性史の〝定番〟でもある。逆にいえば、従来の定番以上の、女性の歴史に関わる動向は、「学習指導要領解説」からはほとんど読み取ることができない。

周知のように、教科書は、その構成面でも内容面でも、文部科学省が告示する「学習指導要領」およびその「解説」に、大きく規定される。検定制度の問題はここでは論じないが、「学習指導要領」そのものがジェンダー主流化を遂げなければ、各教科書の創意工夫のみでジェンダー視点の導入を一貫させることは難しいであろう。

＊　＊　＊

二〇二二年、世界経済フォーラムが公表するジェンダーギャップ指数において、日本は一四六か国中、一一六位であった。ジェンダー格差をめぐっては、二〇一〇年の順位と比較し、改善どころか、悪化さえしている。「一体なぜこのような状況になっているのか、今後ジェンダー格差を解消していくための有効な手立ては何か」（一一頁）という、『歴史教育とジェンダー』が十一年前に問うた議論の出発点を、あらためて真剣に問い直す必要がある。十一年後の二〇三三年のジェンダーギャップ指数に、絶望をしないためにも。

作品のウチソト 2

「気付く心が美しい」

尾西 正成　本学文学部日本語日本文学科教授

「気付く心が美しい」。私淑する和尚様の言葉。二〇年以上前の正月の席を思い出します。

お世話になっているお茶の先生に、「一献ご一緒しませんか」とお誘いいただきました。一月五日夕刻にお伺い。玄関にはインターホンが見つからず、わずかに引き戸が開いているだけ。そろりと中に入ると玄関正面の障子が開き、着物姿の奥様が小声で「皆様お待ちです」と奥の部屋に。真っ暗な部屋に蠟燭がひとつ、床の前には和尚様はじめ立派そうな方々。勧められるままに正座すると奥から茶道の先生が着物でお出まし、炭を直され、袱紗で丁寧に道具を拭き、大ぶりの嶋臺の茶碗にお茶を立てられました。和製不思議の国に飛び込んだような心地。目の前に来た重箱、牛蒡が挟まれた菓子、濃厚な茶、すべてが夢の中のようでした。蝋燭と共に手元に回ってきた香合を拝見、お隣が「あまりうまく焼けてないものですね」と話しかけられ「素敵だと思います。」と答えました。その際に和尚様が「それは、お隣の陶芸の先生がお焼きになったものやで」と大笑い。こんなことが所々に散りばめられていました。最後に席主が深々と頭を下げられて障子が締まり、その後宴席に。最初は緊張のあまりお酒の味などわからない具合。たくさんいただきました。会の最後に芳名録の表題を書くように促され揮毫。仕上がった瞬間に「さすが上手いもんや」と和尚の一声。皆にお誉めいただきその場の主役に。皆に帰りの挨拶をしている中、「僕のような不作法者、恥ずかしくご迷惑をおかけして申し訳ございません」とお詫びしたところ、「あ、楽しかった。もし恥ずかしいとか思ったとしたらこれは席主の責任。席主は皆とあなたをご一緒させたらとても楽しいお席になる、と企んだのでしょう。私たちは皆楽しかったですよ」と。肩の荷が下りたような、陳謝の言葉はこの場に要らなかったことに気付かされました。正直、ワクワクともいえる緊張感から皆様と打ち解けていく心地良さと嬉しさはとても楽しい貴重な時間でした。謝るより先に、楽しかった思いを伝えるべきでした。無粋でした。

これを最初としてご縁をいただいた和尚様には多くを学びました。「気付く心が美しい」とは平易な言葉ながら和尚様の教え。お菓子の取り方がわからない時、お隣に「ご一緒させてください」と取り上げてもらい、正座で足が痺れてきたタイミングで「足を崩しませんか」と声をかけてもらいました。程よく掃かれた露地を歩く草履の鼻緒はふんわりと足が通しやすかった。僕のドジを皆で笑ってもらえたこと。得意の書を披露できたこと。この場に集ったお仲間の一員と実感できたこと。すべてがそこに会した皆様の親切と配慮の賜物であったことを今になって気付きます。

書道コースの作品批評での一コマ。二メートル丈を越える大作を制作した本人が何十枚も壁に貼っています。それに気付いた他の学生達が直ちに交代。手のすいた制作者は、休むことなく次の脚立を運んで、手伝ってくれる学生達が早く楽に貼れるように要領よく作品を渡しています。作品批評しているこちらの邪魔にならないように。息の合った無駄のない自然な動き、ほのぼのとして清々しい。

古い海外の映画に女性が手荷物を差し出し、男性が自然に受け取るシーンを見かけます。男性の親切なのか。周りから彼が気の利かないと思われないようにと気遣う彼女の配慮なのか。お互い感謝を表さない自然な所作も美しい。

『珊瑚枝々』尾西正成
僧問巴陵如何是吹毛劍陵云珊瑚枝々撐著月
（第８回日展会員賞、2021年、成田山書道美術館蔵）

岡倉天心が著した『茶の本』に、「茶の湯は茶、花、絵などをモチーフとして織り成される即興劇である。部屋の色調を乱すような色、動作のリズムを損なうような音、調和を壊すような仕草、あたりの統一を破るような言葉といったものは一切なく、すべての動きは単純かつ自然になされる」とあります。また「善きことをなすにあたってはひそかにこれをおこない、またまおもてにあらわれるにまかせることこそ無上の喜びとする」。この精神は日本の日々の生活にも自然と浸透していると思います。世阿弥の「秘すれば花」という言葉も味わい深い。

私は日々書に携わっていますが、書芸術にも脈々とその心が宿っていることを感じます。題材を選んだり用具を決めたりすることから始まり、いざ制作となると思いの丈を紙面に文字の連なりを以って定着させていきます。そこには不自然なものを排除し、自然の中に心地よい変化を求めます。考えられる配慮を怠らず書き進めていきますが、その配慮を表立って見えないようにしつつ変化を紡いで統一させていく。このような書がカッコ良い。古来の劇作が卒意の中に生まれていることもこの思想が最上であることを証明してくれています。

振り返ると、小学校の時に一度も忘れ物がなかったり。着たい衣服が取り出しやすいところにあったり。顔を洗ったら手の届くところにタオルがあったり。烏が啄んだゴミ袋が直ぐにきれいに掃除されていたり。水の打ってある庭の沓脱石に足を滑らせることがなかったり。飛び石に歩調を合わせると少しゆっくりとした歩みになり呼吸が整ったり。玄関に生けられた蕾が帰る頃に開いていたり…。日常に溢れている美をことごとく見逃していました。やはり私、無粋の権化です。

芸術でいうところの『美』は芸術作品そのものにあるのではなく、それを契機としてこちら側（鑑賞者）の中に生まれるもの。日々の生活の中で何気ない事柄に心を留めて、そこに秘められた親切や思いやりに気付く。これこそが美しいことであり、気付くことで自分自身の中に美が生まれる。まさに「気付く心が美しい」。その美を見付け出すこと、感じ取れる心が大切なのです。

「真の美というものは、不完全なものを前にしてそれを心の中で完全なものに仕上げようとする精神の働きにこそ見いだされるのである」。これも『茶の本』。鑑賞者の中に美が生まれることによって芸術活動が完成します。美のありかは私たち自身なのです。

まだまだ、和尚様の尊い教えの意味を理解、実行できておらず恥ずかしい限りですが、「気付いていない自分」に気付いたことは少しの成長かと慰めています。こんなことで時々に新しい気付きの発見をしていると毎日が新鮮に過ごせ、高村光太郎の「心はいつでもあたらしく　毎日何かしらを発見する」という言葉の真意に掠ったような気分を良くしています。

ナイル東岸アマルナの未完成壁画

小林 裕子
本学文学部歴史遺産学科教授

エジプト中部、ナイル川東岸テル・アル＝アマルナに紀元前一四世紀、古代エジプト第一八王朝の都「アケトアテン（アテンの地平線という意味）」があった。アマルナの遺跡を訪れるには、都市から車をチャーターするか、鉄道でナイル川西岸のミニヤ県まで行き、同地のホテルを拠点にする。日本古代の仏教美術史を専門とする筆者が何故、アマルナの遺跡に興味を抱いたかといえば「未完成」というキーワードが理由である。筆者が研究対象とする七、八世紀の作品は、直接遺物から下絵などの制作過程の情報を得ることが困難だが、古代エジプト絵画の方は王朝時代を通じて過程に変化がなく、未完成作例からかなり解明されている。まず朱線による補正により下描きをおこなう。つぎに壁体がしっかりしている場合はこの段階で凹凸を入れ、画面全体を下地剤で整えてから彩色する。古代エジプトは筆者の研究対象とは地域も時代もかけ離れているが研究史があつく、彩色前のドローイングに常々関心を寄せていたのである。

さて、アマルナは古都メンフィスと聖都テーベの中間地点に位置し、西にナイル、東南北が断崖に守られた場所で、アメンヘテプ四世がアクエンアテンに改名し（以下、アクエンアテン王と記す）、テーベから遷都した地である。新都中核部はタラタートという小型規格石材を用いてわずか五年で造営され、アクエンアテン王は、アメン神をはじめとする伝統的な多神教から離れ、唯一神たる太陽神アテンを国家神とした。しかしながら遷都と宗教改革は多くの人々に受け入れられず、王の死後、還都と多神教復活に相成った。アクエンアテン王は第一八王朝一〇代目の王だったが、著名なツタンカーメンは同王朝一二代目の王として信仰復興やメンフィスへの還都、宗教中心地としてのテーベ復権をおこない、アマルナの都アケトアテンを放棄したとされる。こうした事情から、アマルナは十数年という短命の都であったがゆえに未完成の遺物が多いのである。

アケトアテンの都は整然たる都市計画に沿って造営された。中央部に王宮、アテン神殿や行政施設、王の私邸、北部に王族のための離宮と市街、南部に貴族の住居が置かれ、南北を大通りが貫いている。世界中に知られるベルリン新博物館のネフェルトイティ彩色胸像（図1）は、南部にあった彫刻師トトメス工房で出土した。ネフェルトイティはアクエンアテン王の正妃で、胸像は切れ長の目、頬高の面貌からしてきわめて写実的である。多くの研究者は、アケトアテンの美術をアマルナ様式、アマルナ美術と呼び、自由、写実、自然主義と評し、エジプト美術史のなかでも特異な時代として位置づけている。カイロのエジプト考古学博物館でも、第三室がアマルナ時代の遺物を集めた展示になっている。

ベルリン新博物館のステラ（石碑）をみると（図2）、画面上部中央に太陽神アテンの日輪が輝き、先端が手形になった光条が放射状に降り注ぐ。光条下にアクエンアテン王とネフェルトイティ夫妻が向き合い娘たちを抱く場面となっているが、アマルナ出土のステラや岩窟墓壁面にはこうした団欒図のほか礼拝図や会食図など王と家族の日常を切り取った構図が多々みられる。これは、アテン神に人々が自ら祈ることができず、夫妻だけが神との仲介者だったためとされる。またD・アーノルドは夫妻の表現を「双子」と評しているが、たしかにふたりとも後方に張り出した冠、明瞭な骨格、弾力ある肉体描写がみられ、揃いのプリーツのガウンを着ている。J・ティルディスレイは、アマルナ時代に男女の着衣の区別が曖昧になったことを指摘したうえで、アクエンアテン王（図3）の姿を女性的と述べている。王の細長い頭蓋骨や長い首と顎、垂れ下がった胸、膨らんだ腹部、極端に細い手足の解釈は、従来、研究者によって異なり「王の威厳を誇張」「病気が原因」など諸説ある。ティルディスレイは、王が新世界を構築するにあたり、自身の肉体を意図的かつ象徴的に表現することで男女両面を包含しようとしたと論じている。女性の能力を信じ、恭敬し、争いを好まない王は常に王妃とともに行動し、王妃と愛し合う図像（図4）がいくつものこされていた。しかしアクエンアテン王の遷都や宗教改革は、人々に受け入れられず継承されずに破壊された。

ネフェルトイティは出自も没年もいくつか説があって謎多き女性だが、彼女が王位に就いたとする見解がある。彼女以前もハトシェプスト女王のような有能な最高権力者がいたが、右の説によるとネフェルトイティの場合は次政権への暫定的な即位だったようで、アケトアテンからの還都や多神教回復にも関わった可能性があるらしい。アマルナ時代に夫がおこなっていたアテン信仰や政策、男女の長所を生かす人間評価は未完成のまま破棄されたが、彼女はこうした変化をどうみていたのだろうか。筆者はアマルナの未完成墓に籠もりながら、朱と黒のドローイングを前に、複雑な感情を抱かずにはいられなかった。

図2 アテン神の下にいるアクエンアテン、ネフェルティティ、そして三人の娘たちのステラ
（ベルリン新国立博物館コレクションデータベース）

図1 ネフェルトイティ胸像
（ベルリン新国立博物館コレクションデータベース）

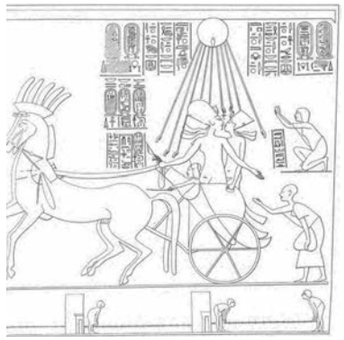


図4 南墓地九号マフの墓かきおこし図
（The Rock Tombs Of El Amarna: Tombs Of Penthu, Mahu, And Others,1906）

図3 アメンヘテプ四世
（エジプト考古学博物館コレクションデータベース）

【主要参考文献】
ハンネローア・キシュケヴィッツ『エジプトの壁画と素描』岩崎美術社、一九七三年。
Joyce Tyldesley「Daughters of Isis: Women of Ancient Egypt」London Penguin,1994.
Dorothea Arnold, James P. Allen and L. Green「The Royal Women of Amarna」Metropolitan Museum of Art,1996.
河合望『古代エジプト全史』雄山閣、二〇二一年。

●連載●イギリス女性生活誌

第47回

労働者階級女性のレジェンドを求めて

松浦　京子
京都橘大学名誉教授

ここ七回は「レジェンド・ウーマン」という標題の下で語ってきたが、その意図は、最後の回で述べたように「それを語ることで、知られてはいない（いわばinvisibleである）けれども、たしかに存在した、または彼女たちに続いた多くの女性たちを象徴させることができる存在、つまり、彼女たちを通して時代の動きを物語ることができる存在を、レジェンドとしてとらえる」ことであった。そして、近代看護の成立期に活躍した女性たちを紹介した。ただ、彼女たちは、当時レディと呼ばれた中流階級女性ばかりであった。そう、前回書いた通り労働者階級女性のレジェンドを語るのは難しいのである。しかし、労働者階級にも上記の定義に適う「レジェンド・ウーマン」は存在するはず。しないはずがない。この考えを携えて、ここからしばらくは、労働者階級女性の活躍に目を向けたい。

まずは、一九世紀後半という時代における労働女性の一側面を示す事例として、慈善篤志組織に雇用され活動した女性たちを語ることにしよう。以下は、そうした女性の一人が残した「報告」である。

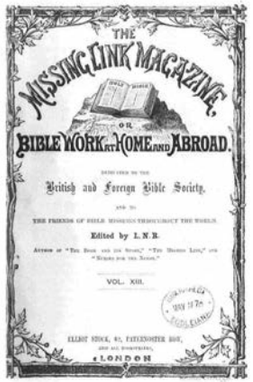
二日前に出産した女性のケアを、バイブルウーマンから依頼されて出向いた。…みすぼらしい路地の奥まで進んで、穴蔵のような暗い住まいを見つけて中に入っていった。……中では四人兄弟たちが裸同然で暖炉の周りに座りこんでいて、母親は暗い隅でぼろの塊の上に横たわっているというあり様であった。私は彼女に近づき声をかけた。しかし、彼女は「すぐに出て行って。ここには用なんてないわ。顔を見ればわかるけど、どこかの伝道会の人なんでしょ。ここでそんな人にちょっとでも説教されたくはないの。だから出てって」と叫びだした。激昂しかかっているのが見てとれたので、これ以上興奮させない方がよいと判断し、私は、子供たちに声をかけることにし、……イエスさまについて話しをしたが、一向に母親が関心を向けてこないので、いったん帰ることにして他の手立てを思案した。夕食後、ベビー服を持ってもう一度出かけて行った。そして、母親のもとに近づき「ねぇ、私も、人の世話にならないっていう気持ちはいいと思うわ。でもね、その赤ちゃん、私が見たいの。私だって赤ん坊が好きなのよ。ちょっとでいいからその子を私に見せて」と話しかけた。母親がようやく頷いたので、すぐさま赤ん坊を受け取り、運んできた湯をつかい臍の緒の処置などを始めた。赤ん坊をくるんでいた古いぼろ布を切り裂くと虫がはい出てきたが、しっかりと洗い清めて持参した清潔なベビー服を着せて、母親のもとに戻した（そのときの彼女の様子を見てほしかった）。彼女はひどく取り乱して大粒の涙をあふれさせ、汚れた顔をぬらして泣き続け、もはや私の助けを拒もうとはしなかった。同意を得て聖書を数行読み聞かせて、その後彼女と話を交わした。……夫はビラ貼りの仕事で週給一五シリングを稼ぐが、そのほとんどを酒に費やしてしまうことなどを聞かされた。

上記は、貧民救済のための伝道団にして、一九世紀最大の女性ヴィジティング（訪問活動）組織であった「ランヤード・ミッション」の機関誌『ミッシング・リンク・マガジンMLM』誌の一八七七年一月号の記事で、訪問看護活動に従事するナースN（ナースの名はイニシャルで記載される）のある日の体験を患者との会話の再現を交えてレポートしたものからの抜粋である。この後には、母親がナースを最初拒んだ理由はいわゆる伝道団の活動に対する嫌悪であったこと、そして、それはナースの好意によって覆（くつがえ）されたのだという描写があり、ナースが弱っている母親のために肉汁スープをつくったことや子供服の修繕を二人でしたこと、そして体力回復のためにランヤード・ミッションから栄養物を支給されるように手配したことなどが語られるという内容であった。

会員の寄付や援助によって成り立っている慈善篤志組織の機関誌は、当然ながら会員に対する活動内容や成果の報告、もとい宣伝という役割を担っているわけで、上記の内容もまさにそれに見合うものとして見なければならない。しかし、同時に、この報告が、一九世紀に女性によって担われた家庭訪問という慈善活動の実際をまざまざと示すものであることは言うまでもないだろう。

連載一六回（クロノス一六号。二〇〇二年三月刊）から九回にわたって述べたように、一九世紀の中流階級女性の注目すべき特徴に慈善活動、とりわけヴィジティングとして特記される組織的家庭訪問への貢献があった。彼女たちは組織を結成し、資金を集め、活動を展開した。その活動の多くは後の国家福祉制度として継続したことも記述してきたとおりである。ただ、語り残してきたことがある。それは、実際に貧民家庭に赴き、その家の女性たちと言葉を交わし継続的に日々の生活を支えたヴィジター（訪問員）たちには、実は、労働者階級の女性が広範に存在したことである。訪問活動組織の多くは専従の訪問員として労働者階級女性を雇用していたわけであり、こうした活動は、労働者階級女性からすれば、れっきとした仕事（経済活動）であったのである。上記のナースNやバイブルウーマンもそうした女性であった。

では、慈善組織に雇用されて活動した労働者階級女性とはどのような人たちであったのだろうか。彼女たちは、厳然たる階級制度と経済格差のなかで、「貧困」にあえぐ人々に対して「同じ労働者階級」として何を感じていたのだろうか、いや、訪問される側からすれば、彼女たちはどう見えていたのだろうか。そして、彼女たちを雇用する側、すなわち中流階級女性との関係はどのようなものであったのだろうか。こうしたことを今後の話題として考えていきたいが、それは、また、労働者階級女性と時代の動きの関りを物語ることになるのではないかと期待しているのである。



『ミッシング・リンク・マガジン』誌
1877年版 表紙

近代日本音楽史を彩る女性たち

8 最初の国際的オペラ歌手 三浦 環（その1）

佐野 仁美
本学発達教育学部
児童教育学科教授

前回までは、西洋音楽が移入されたばかりの創成期の日本人女性ピアニストを紹介し、ドイツ音楽中心の楽壇が形成されてきたことを述べた。今回は一世代後の三浦環（一八八四―一九四六［明治一七―昭和二一］年）を取り上げよう。環は、戦前にコスモポリタンとして活躍した最初の日本人プリマドンナで、NHKドラマ『エール』の双浦環のモデルである。

鹿鳴館で華やかな宴が繰り広げられていた東京で、環は日本初の公証人である柴田猛甫と母登波の間に生まれた。進歩的な父は芸事を好み、環は藤間流の踊りや長唄、山田流の箏を習った。後に《蝶々夫人》を演じるのに非常に役立ったという。天性の良い声に恵まれ、音感も身につけた環は、西洋文化が浸透していった時代に、合理的な考えを持って人生を切り拓いていく。

環は通っていた東京女学館の教員より東京音楽学校への進学を勧められる。女性問題で両親は離婚し、芸事はお嫁入りの資格で卒業後は結婚するのが当然という父は、「西洋の芸者」と音楽家志望に大反対であった。進歩的な家庭でも、音楽を「芸事」と見なしていたのである。父からの条件で、環は軍医藤井善一と内祝言をあげ、一九〇〇年に音楽学校に入学した。ピアノを習った滝廉太郎から求婚され、事情を話せずに困ったという。

乗り物に弱い環は、イギリス製の赤い自転車に乗って芝から上野の音楽学校に通学した。まだ自転車に乗る女性は珍しく、前髪を赤いリボンで結び、紫の矢絣（やがすり）の着物に海老茶の袴と靴を履いて通学する環の姿は「自転車美人」として評判になり、付け文をしたりする者まで現れた。後に二つ年下の生徒の山田耕筰には行き手を遮（さえぎ）るいたずらをされて転倒したこともあった。選科に通っていた田辺尚雄の回想によれば、美声ばかりでなく、美貌とともに艶（えん）な態度がクレオパトラを思わせる環の人気は一年生の頃から既に大したものので、都中の青年を魅了していたという。封建的な因襲を乗り越える「ハイカラさん」の姿が目に浮かぶ。

環は、声楽を幸田延やお雇いドイツ人教師のユンケルに習った。高名なヴァイオリニスト、ヨアヒム門下のユンケルからは音楽の解釈やドイツ語の発音を教わったが、発声法は自分自身で工夫するしかなく、喉を無理して使わない発声法を一人で会得した結果、超絶技巧を要する《お蝶夫人》を二千回も上演できたと語っている。音楽学校でイタリア式の歌唱法を学んだ訳ではないことに注目しておこう。

一九世末のヨーロッパではワーグナーの芸術が熱狂的に受け入れられていた。鴎外ら帰朝者の文章によりワーグナーというすごい作曲家がいるという情報がもたらされたが、実際にオペラを見た日本人はほんのわずかだった。オペラ上演の機運が高まり、音楽学校と帝大の有志による歌劇研究会が結成され、ワーグナーは叶わなかったものの、オペラの改革者グルックの《オルフォイス》全曲が東京音楽学校奏楽堂で一九〇三年に上演された。これは、石倉小三郎や近藤朔風らが日本語訳を、美術学校の山本芳翠や藤島武二らが衣装や背景を、音楽学校のノエル＝ペリーが演出と指揮を、ケーベルがピアノ伴奏を担当し、卒業生と生徒が出演するという、記念碑的な出来事だった。本科二年生の環は、エウリディーチェを演じてオペラデビューし、当日は紳士淑女で一杯になったという。ちなみに、その後も音楽学校ではオペラが計画されたが、「男女七歳にして席を同じくせず」という男女差別が見られた当時、風紀問題がマスコミに取り上げられていた。男女が一緒に練習することを嫌った文部省が中止を求め、オペラ上演は別に展開していく。

環は昭憲皇后の音楽学校行啓の折に演奏し、感激のあまり生涯を音楽に捧げようと決心したという。一九〇四年に研究科に進み、一九〇五年三月二四日の『都新聞』の「音楽学校演奏会」という記事には、定期演奏会における環の申し分ないモーツァルトの独唱が書かれている。環は、来日したイギリスのヴィクトリア女王の第三王子であるコンノート殿下の御前演奏も行った。

明治後期には、明治音楽会、東京フィルハーモニー会や音楽奨励会等が結成されて演奏会が行われ、聴衆が形成されていく。ようやく洋楽だけで音楽会が成立するようになったのである。音楽界の花形であった環は、夫の赴任地に同行せず、その離婚はゴシップ記事になった。助教授を務めていた音楽学校を一九〇九年に辞職し、後に、帝大で助手をしていた三浦政太郎と一九一三年に正式に結婚することになる。『東京朝日新聞』一九一〇年六月七日の「好楽会第二回演奏」という記事では、閉塞していた環が久しぶりに登場して人気を集めた様子を伝え、技巧は手に入ったものであるが音量が足りずに一本調子になるのを一種の役者染みた身振りで補おうとするのが嫌味であると報じている。この表現力が後の海外での成功に導いたと思われる。

一九一一年には、外国の貴賓に日本文化を紹介するために、歌舞伎や新劇、オペラ等が上演できる日本初の本格的な洋式劇場の帝国劇場が開場した。環は歌劇部のプリマドンナ兼教師になって一〇月に音楽学校のウエルクマイステル作曲の《胡蝶の舞》に出演し、一二月にはイタリアから来日したテナーのサルコリーとマスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》を原語で日本人として部分初演し、成功を収めた。翌年二月には能を題材にユンケルが曲を付けた《熊野》を上演したが、こちらは歌舞伎風の衣装や背景の雰囲気と音楽が合わず、大失敗だった。『中央公論』一九一二年七月号には「松井須磨子と柴田環」という人物評論が組まれ、帝国劇場の演劇主任であった松居松葉は、両人とも芸そのものを絶愛しそのためには何人の前にも跪くを恥としないほど謙虚であると語っている。また、六月に天竺を舞台にしたウエルクマイステル作の《釈迦》を見た有島生馬は、「ソプラノ・リ、コに適した柴田夫人」という文章で、環の美しい声質や日本人としては豊かな音量に触れつつ、日本にオペラを移すためには、声価の定まった歌劇を演奏するのが急務且つ最上の方法であると論じた。オペラ熱は日本の題材を世界に通用するオペラで表現しようとする創作歌劇を生んだが、題材を理解する日本人作曲家やその表現方法が育っていなかったのである。明治天皇の崩御で歌舞音曲停止になり、新聞記者との関係に悩んだ環は、三浦の赴任先のシンガポールに渡った。（以下次号）

《オルフォイス》の上演。
左から二人目が柴田環。
出典：『東京芸術大学百年史
東京音楽学校篇 第一巻』
音楽之友社、1987年

【主要参考文献】
田辺尚雄『明治音楽物語』青蛙房、一九六五年。
田辺久之『新版 考証 三浦環』幻冬舎、二〇二〇年。
増井敬三『日本オペラ史～一九五二』昭和音楽大学オペラ研究所編、水曜社、二〇〇三年。
吉本明光編『お蝶夫人―三浦環遺稿』右文社、一九四七年。

女性歴史文化研究所 第29回シンポジウム報告

考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族

渡邊 和行 本学文学部歴史学科教授

●日　　時：2022年6月18日（土）13：00～16：30
●会　　場：キャンパスプラザ京都
●講　　師：阿部 千春（北海道庁縄文世界遺産推進室特別研究員／元函館市縄文文化交流センター館長）
「縄文時代の家族と母性　―北海道の縄文遺跡を事例として―」
中久保 辰夫（本学文学部歴史遺産学科准教授）
「古墳時代の家族・ジェンダー　―近畿地域の事例を中心として―」
●司会・コーディネーター：増渕 徹（本学文学部歴史学科教授）

去る六月一八日、女性歴史文化研究所のシンポジウムが三年ぶりに開かれた。コロナ対策上の人数制限を伴ったとはいえ、一〇〇名を超す市民の参加を得ることができた。

シンポジウムのテーマは「考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族」である。縄文時代と古墳時代の遺跡・遺物から、当時の女性・子ども・家族の姿や心を読み取ろうとする企画であった。とくに縄文時代については、二〇二一年に世界文化遺産に登録された一七の「北海道・北東北の縄文遺跡群」のうち、道南にある六遺跡の発掘調査から出土した遺物に光が当てられた。これらの遺跡から、女性をかたどる中空土偶や、子どもの足形を捺した土板などが出土していた。講師は、これら遺跡の世界遺産登録にも中心的に関与された阿部氏だ。古墳時代については、本学の中久保氏が近畿地域の古墳から出土する埴輪などの遺物にジェンダー分析を試みた。それではシンポジウムの概要を紹介しよう。

＊縄文時代の家族と母性

縄文土器で知られる縄文時代は、一万年以上にわたって漁撈・狩猟・採集による食料生産を基盤としながら、長期にわたる定住生活を実現した世界に例のない社会であった。この点を踏まえつつ、阿部氏は北海道の縄文遺跡の特異性から講演を始められた。海流や植物生態系がもたらす動植物の自然の恵みの豊かさが定住を促したが、北海道の縄文社会は自給自足の社会ではなくて交易（新潟の翡翠、秋田のアスファルト等）を伴う社会であった。

次に家族と母性の本題について。定住生活によって墓域が登場したが、墓から幼児の足形がある土板が出土していることから、多産多死の時代とはいえ夭折した我が子を悼む感情を確認できること、妊産婦を埋葬した墓の遺物に弁柄が分厚く塗られていたことからも丁重に埋葬されたことが窺えた。また、四肢骨が細い人骨からは、ケアを受けていた可能性が指摘された。

そして土偶の話題に転じ、土偶は潜在的な母性を持った女性として造られるが、縄文後期になると性を超越した造形物になるという見通しのもと、ほとんどの土偶が壊れた状態で出土することの意味を国宝の中空土偶から説明された。土偶が故意に破壊される現象から、土偶の製作と破壊という関係に生と死と再生という縄文の精神性が見出せること、また縄文時代の二項原理（男性／女性、偶数／奇数、赤／黒）は、対立ではなくて融合の原理であることが指摘された。さらに、世界遺産について文化政策・教育・地域振興という三つの視点を提示され、「持続可能な開発のための教育（ESD）」[注]が重要だとまとめられた。

貝塚はゴミ捨て場ではなくて祭祀が行われた場、墓域でもあったとの指摘に蒙を啓かれた人も多かっただろうし、中空土偶をCTスキャンしたときの苦労話（遺物を撮る前例がないため、茅空「カックウ」という明治生まれの女性として診察券を発行のうえ撮影）に、破顔一笑の人も多かったことだろう。

＊古墳時代の家族・ジェンダー

中久保氏の報告は、①民族誌から見たジェンダー、②古墳被葬者にみる女性・子ども・家族、③埴輪にあらわれたジェンダーの三部構成であった。①では、先行研究に依拠して性別分業について男性優位労働と女性優位労働の概略が示された（後述）。②では古墳の人骨資料から、女性首長の存在、古墳時代の親族関係はキョウダイ原理が基本で兄弟姉妹が同じ古墳に埋葬されること、埴輪がある古墳の被葬者は女性であり、武器の副葬品がある古墳の被葬者は男性であること、四世紀の古墳の埋葬者は男女半々であったが、五世紀頃から父系化が進むこと、子どもの埋葬棺の特徴などが明らかにされた。③については、埴輪には社会的性差が確認でき、埴輪から性別分業や職掌が把握できること、さらには埴輪から政治空間とジェンダーの関係が読み取れることなどの説明があった。

＊パネルディスカッション

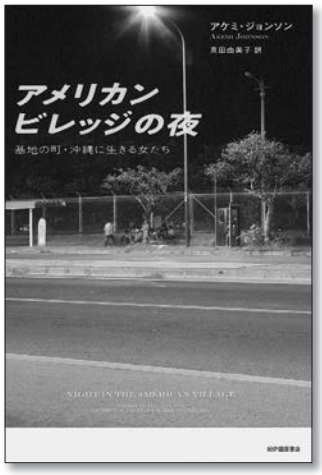
二つの講演に対してフロアから質問が多数寄せられたが、ここでは二～三の質問に絞って紹介しよう。まずは時代区分の質問に対して、漁労採集から稲作へという本州の発展とは異なり、北海道には稲作はなく、交易を前提とした狩猟採集が続いたこと、さらにはオホーツク文化の流入とその在地化、さらにアイヌ文化へと展開していったことが述べられた。次いで、縄文時代と古墳時代の性別役割ないし分業の実態について質問があった。縄文時代には狩猟や石器造りは男性の仕事であり、土器造りは女性の仕事であった。古墳時代には武器製作や採石などの力仕事や遠隔地に赴く労働は男性の仕事であり、製粉・水運び・調理などのように筋力を必要とせず、近場の仕事が女性の仕事であったという。

最後に司会の増渕氏が、世界遺産の意義やあり方について話を振られた。講師からは世界遺産は地球遺産にして地域遺産でもあるので、郷土愛という地域への愛着は地域住民からの自発的な運動の上に構築される必要性や、世界遺産が身近な文化遺産に目を向けて掘り起こす役割を果たすことへの期待などが語られた。遺跡の研究によって過去に対する認識が改まり、現在の生活の更新に繋がることが指摘されてシンポジウムは終了した。

注　ESD（Education for Sustainable Development）、持続可能な社会の創り手を育む教育のこと。

『アメリカンビレッジの夜
基地の町・沖縄に生きる女たち』

アケミ・ジョンソン 著・真田由美子 訳　紀伊國屋書店、2021 年 9 月刊



野田 泰三　本学文学部歴史学科教授

嘉手納基地や海兵隊司令部の置かれるキャンプ・フォスター（瑞慶覧）に隣接する北谷町美浜のアメリカンビレッジ――米軍射撃場跡地に建設されたアメリカンリゾート施設――は日本人観光客にまじって米軍関係者やその家族で賑わう。そして、米軍兵士との出会いを求める女性、いわゆる“アメジョ”も集まる。沖縄戦の悲劇が語り継がれる一方で、海兵隊員と地元女性が戯れる――このギャップに戸惑う著者は、基地周辺で暮らす女性たちと過ごすなかで、米軍基地が地元社会に与える影響の根深さに気づく。

本書には沖縄に住む様々な立場の女性が登場する。沖縄戦を体験したサチコ、基地問題や米兵による性暴力問題と戦うスズヨや大学生のアイ、“アメジョ”のイブ、普天間基地で米軍スタッフとして働くエミ、アフリカ系アメリカ人の退役軍人を父に持つミヨ、海兵隊将校の妻アシュリー、フィリピン出身のデイジーなど。彼女たちの体験や行動、沖縄や基地に対する想いがそれぞれの目線で語られるとともに、戦中戦後を中心とした沖縄の歴史、基地問題の歴史と現状、日米両政府の対応、さらに多くの女性たちや研究者の声が豊富な資料とともに紹介される。

母国を離れ単身極東アジアに赴任する米軍兵士の心理や彼等に対する米軍の教育・沖縄観、米軍兵士と沖縄女性の交際・結婚につきまとう様々な障壁、両者の間に生まれたバイレイシャルのアイデンティティーや教育問題、基地兵士を対象とするセックスワーカー（性風俗産業）の実情、戦争・基地問題をめぐる世代間ギャップ、基地をめぐる議論が二極化する中で沈黙する“グレイゾーン”の人々の存在等々、本土に住む私たちには気づかされ教えられることも多い。

著者の語り口は決して押し付けがましくはない。基地問題を扱った書物としては、むしろ冷静かつ客観的である。それゆえ、なおさら「基地問題は女性の安全保障の問題である」との言葉は突き刺さる。

LIME 通信

国連の女性局（UN ウィメン）と経済社会局がまとめた報告書で、このほど 9 月初めに驚くべきことが公表されました。完全なジェンダー平等実現には、現在の進捗ペースだと 300 年近くを要するというのです。これは、パンデミックや国際紛争、気候変動などの世界的な逆風を加味しても、2030 年までのジェンダー平等達成を掲げる国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」から大きくかけ離れた状況にあります。

2015 年 9 月の国連サミットで採択された、この SDGs の 2030 アジェンダ達成への取り組みは、現在折り返し地点を迎えています。2022 年 6 月に発表された SDGs 達成度ランキングでは、日本は 163 カ国中 19 位と、前年からランクを 1 つ下げました。17 目標のうち「主要課題が残る」とされた 6 目標のうち、「ジェンダー平等を実現しよう」については、やや改善されたものの達成不十分で、中でも国会議員の女性割合、および男女賃金格差の 2 つの指標の評価が低く、依然として課題を残しています。

今年度、女性歴史文化研究所は 30 周年を迎えました。今後は、これまで積み上げてきた女性史学の研究成果をベースに、現代的な視座・視点も加え、総合大学化した本学の強みを活かして女性の未来を考える研究活動や取り組みを推進してまいります。

CHRONOS（クロノス）　vol.47
発行日：2022 年 10 月
発　行：京都橘大学　女性歴史文化研究所
〒 607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel. 075-574-4186　Fax. 075-574-4149
E-mail：iwhc@tachibana-u.ac.jp
京都橘大学
女性歴史文化研究所